くらがの

発行所　倉賀野神社
〒370-1201
群馬県高崎市倉賀野町 1263 番地
電　話　027-346-2158
ＦＡＸ　027-346-2184
例祭（秋季大祭）10 月 19 日
春季大祭　　4 月 19 日
公式ホームページ　www.chinju.info/

社頭所感

宮司　髙木直明

まずもって皇室の弥栄と国の安寧を神前にご祈念申し上げます。氏子崇敬者の皆さまには、日々ご清祥にお過ごしのこととお慶び申し上げます。また神社の護持運営に格別のお力添えをいただきますことに心より御礼を申し上げます。

CO_2 による「地球温暖化」がいわれ、今夏は干天と豪雨の異常気象により、農作物も大きな影響を受けました。世界中で脱温暖化に向けて対策を進めています。一方で、私たちの日常は熱中症が常態化し、「もう我慢の限界」との声も聞こえました。

気象の変異に対して人びとはどのように向き合ってきたのでしょう。今からおよそ千三百年前、奈良時代に成立した『日本書紀』に、旱魃の記録が見えます。第三十五代皇極天皇元年（西暦六四二年）の六月に「天皇、南淵の河の上に幸して、跪きて四方を拝み、天を仰ぎて祈ひたまふ。即ち雷なり大雨ふる。遂に雨ふること五日。天下をあまねく潤しつ。」とあります。旱に苦しむ民の姿に皇極女帝は心を痛め、奈良の飛鳥川の川上にいでまして雨を祈ったのでした。

身近な例が、この倉賀野宿にも残ります。文久三年（一八六三）七月の神主の日記です。照りつける空、もう何日も雨が降っていません。宿内の若者衆が連れ立って、榛名山の御神水をいただきに山を駆け上がっていきました。走り戻ると町民一同が鎮守の杜に集まり、続いて烏川の川原に繰り出して、二夜三日、雨乞いの神事をおこなったというのです。

あながち非科学的と侮れません。現代の私たちは、科学の知見を駆使して異変に対処しようとつとめますが、力の及ばないことがあります。古の人びとはこのときに、絶望するのではなく、天地の神々に祈ったのでした。

そうして今日にありましても、産土の神社の前に手を合わせ、祈る人びとの姿が絶えることはありません。

境内点描

「狐 坐像」
境内社・冠稲荷神社の前に居並ぶ狐。台座に「東京市　魚常　明治二十六年四月吉日」と見える。

「浦安の舞」
春秋の大祭に倉賀野小・中の子供達が奉納。「あめつちの 神にぞ祈る あさなぎの海のごとくに 波たたぬ世を」と昭和天皇御製がうたわれている。

「飯塚久敏と良寛の碑」
本殿裏手に建碑。久敏は倉賀野宿出身の文人で、天保 14 年の著『橘物語』は、のちに数ある良寛伝の嚆矢とされる。

倉賀野神社 由緒略記

○御祭神は大國魂大神といいます。国土発展の神であるとともに、医療看護・縁結び・夫婦和合の御神徳あらたかであります。

○第十代崇神天皇の御代に、皇子の豊城入彦命は父帝から東国を平定するよう命ぜられ、出立の時に御愛石（亀形の自然石）を授けられました。それは倭大國魂神の御分霊といわれ、命は当地に到着すると松樹を植え、御愛石を御魂代として祭祀をなさったといます。二千年昔の亀石は「ご神体のクニタマさま」として今も御本殿に奉安されます。

○大同二年（八〇七）、坂上田村麻呂の東征凱旋の途次、この地で造営舞楽を奏上したといわれる「翁面」が社宝として伝わります。

○往古の倉賀野の周辺地域には「宮原荘」の名称があり、飯玉大明神（倉賀野神社の古称）は上野国群馬郡宮原荘の総鎮守といわれてきました。

○やがて武蔵七党の一つ、児玉党の流れをくむ秩父三郎高俊がこの地を領知して、倉賀野氏の始祖となります。建長五年（一二五三）、倉賀野三郎高俊により社殿が造営されました。やがて烏川左岸崖上の要害の地に倉賀野城が築かれ、神社は倉賀野氏の氏神として、社殿の修復・造営が重ねられてきました。

○永禄年間には、倉賀野氏の後継の金井淡路守による社殿の修復。享保十九年（一七三四）に淡路守の子孫が奉納した「飯玉大明神」扁額がいま拝殿に掲げられています。

○江戸時代、倉賀野は中山道の宿場として、また利根川水運の最上流の河岸として賑わいました。神社は近隣七ヶ郷の村々の総鎮守として広く崇敬を集めました。

○明治四十二年、四十三年に近隣神社を合祀し、倉賀野神社と改称しました。

おもな年間祭事

一月十五日	境内社 北向道祖神大祭
二月十一日	境内社 冠稲荷初午大祭
四月十九日	春季例大祭
六月中旬	神饌田 御田植祭
六月三十日	夏越大祓式
八月七日	七夕祭り
十月中旬	神饌田 抜穂祭
十月十九日	秋季例大祭
十一月十五日	七五三詣
十二月三十一日	年越大祓式

太々神楽保存会の「稲荷種まきの舞」。滑稽の舞に笑いと拍手がわき起こる。

祭りに集う〈令和五年春祭り〉

境内で「くじびき」何が当たるかな？

お神楽の合間に、「福投げ」お餅やお菓子が撒かれる。

新任ご紹介　令和五年四月、倉賀野神社総代会長に横町の亀山憲明氏が就任されました。神社総代会に対しましてこれからも皆様のご協力をお願い申し上げます。前会長の塚越宏様には神社のために御尽力をいただき真に有難うございました。

倉賀野神社奉賛会のご案内

奉賛会に加入して神様の御守護をいっそう厚く戴きましょう。

○奉賛会 年会費
正会員 二千円　特別会員 一万円

祭典の振興、文化財の保存継承、神域の緑化保全にどうぞお力添え下さい。

お問合せ☎027（346）2158

編集後記　▽新型コロナの位置づけが五類に移行し、世の中も徐々にこれまでのように。しかし地域の山車太鼓保存会では、練習も、本番も、三年間自粛した空白はあまりに大きい ▽自称「太鼓のおじさん」は、子供たちに太鼓の楽しさを体感し、ふるさとの記憶を残してほしいと、強く願う ▽おじさんが「よし、これからだ！」と思った矢先、え？　今度はインフルエンザ？ ▽しかし三年間の経験を無駄にはしない。くじけない。もっとうまく対処していこう。みんなが心を一つに。（直）

◇五月、拝殿に御大典記念事業の額を掲額　御代替りを奉祝し、令和二年に御本殿の屋根替えを完了したことを奉告し後世に伝えるものです。

◇六月十四日～十六日、やるベンチャー体験　倉賀野中の二年生男子二人が神社で職場体験学習。神職の作法を体験したり、境内の池の掃除など、充実した三日間でした。

「国魂の池」の水替えに汗を流す。

◇六月二十二日、御田植祭　先ず境内の神饌田の前で祝詞奏上の神事。神社総代会と倉賀野中生徒会の代表が参加しました。この日は天からの恵みの雨をたっぷりといただきながら、記憶に残るお田植えができました。

その後、順調に生育して10月12日に抜穂祭（稲刈り）を迎えた。

◇六月二十五日、「大祓詞」の書写会　二十三名が参加して参集殿でおこないました。今後も継続して開催してまいります。

およそ２時間、書写のしずかな時が流れている。

◇六月三十日、夏越の大祓式　神職と参列者が正面参道に整列して、先ず「茅輪くぐりの儀」、続いて社殿内で「大祓詞奏上の儀」をおこないました。

夏越大祓は半年間のつみけがれを祓い落とすとともに、疫病除けを祈願する神事。

一同が列をなして茅輪をくぐる。

社殿内で「大祓詞」を皆が一緒に奏上する儀を、四年ぶりにおこなった。

◇八月七日、七夕祭り　七夕は古来、学芸の上達を祈るお祭りでもあります。小学四年生二人が拝殿内で「豊栄の舞」を神前に奉納しました。

神事のあとには、御社頭で「たなばたさま」の歌を皆が一緒に歌う。

ささのは さらさら のきばにゆれる
おほしさま きらきら きんぎんすなご
ごしきの たんざく わたしがかいた
おほしさま きらきら そらからみてる

七夕祭りの境内は、上町山車太鼓保存会の子供たちの奉納演奏で賑わう。

古記録探索

高崎城　松平のお殿様にお目見え

江戸享保期から明治に至るまでの約百五十年間、高崎城主として松平氏が君臨していた。松平氏は代々幕府の重職を兼ねていて、ほとんどの期間を江戸に在府していた。そして城主の地元入府の際には「殿様御目見」の慣わしがあった。

天保三年、叶わなかった御目見

倉賀野宿・下町の諏訪神社神主高木信濃の日記から、天保三年（一八三二）の御目見を見てみよう。

八月二十六日、「檀那此度入府に付在城中御目見相願候はば、先格有無の訳書加願書を取調、来る二十九日迄、角兵衛役所へ届出さるべく候」との廻状が到来した。城主松平右京亮輝承が初めて領地に入るので、御目見の願い書を提出するようにという触れである。「先格有無」とあるように各人に御目見の先例があるかどうかが許可の前提になっていたようだ。

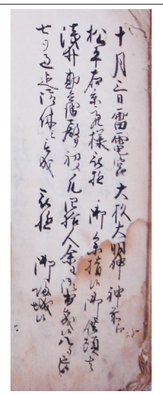
廻状は高崎町奉行の深井助右衛門と柴山角兵衛の連名で発せられている。寺社奉行を兼ねる役職であった。宛先は、倉賀野宿の「養報寺、九品寺、永泉寺、安楽寺、林西寺、長賀寺、大学寺、神宮寺、長命寺、三光寺、田口近江、高木信濃、高木出雲」とあり、末尾の三名が順に八幡、諏訪、飯玉（現在の倉賀野神社）の神主である。倉賀野宿には三つの神主家があった。

諏訪神主の信濃は「今般　殿様御帰城遊ばされ候に付、三本入扇子箱差上冥加として御目見仕りたく願い上げ奉り候」と願書を提出し、併せて「文政五年午（一八二二）九月にも御目見仕候」と、先代城主松平輝延のときの前例を申述している。他の記録を見ても、倉賀野の神主は御目見に「三本入扇子箱」を献上する慣わしであったようだ。

その後も役所からは「今五日（九月）檀那江戸表発駕致され明後七日入部」などと到着の予定を逐次伝達してくるとともに、「在城中火の用心、境内締向等精々入念に」との注意を発している。そして御目見は十月五日に高崎城内の「二ノ丸住居」でおこなわれることに決まった。

ところが直前の十月三日になり、信濃は急遽「持病差発し参上仕り兼候」と寺社奉行所あてに届け出ている。結局、倉賀野の神主では八幡・田口近江と飯玉・高木出雲だけが御目見に参上したのだった。

しかし日記の続きを読み、驚くのは、その同じ十月三日、神主信濃が兼帯する「雷電宮大杉大明神」に件の城主松平輝承の一行が参詣したことである。信濃の日記（左写真）には、お供に「凡四十人余り御出成られ候」そして八つ過ぎ（午後二時頃）から七つ過ぎ（四時頃）まで御休みになったあとご帰城されたと書かれている。当人は病気の身でさぞ気を揉んだことであろう。雷電宮大杉大明神は往時たいへん隆盛であった倉賀野河岸に鎮座する、舟運守護の神社であった。



天保十二年の御目見

次に見るのは倉賀野宿・上町の飯玉神主高木出雲の日記で、天保十二年（一八四一）のことである。

このときの城主は松平輝充。九月三日に江戸表を発駕した城主は、五日に高崎に入部予定との廻状が到達した。十月七日、倉賀野の八幡・田口近江、諏訪・高木左近、飯玉・高木出雲の三名が高崎城「二ノ丸住居」に参上した。出雲は「その節、落合村宗永寺の馬恩借いたし、馬しゃうにて大手前迄罷越」と書いている。落合村（現在の藤岡市上落合）の寺に頼んで馬を借り、高崎城の大手門（今の高崎高松郵便局のあたり）までの道中を馬上で進んだ。

お供として「若頭二人、草履取一人、挟箱一人、傘持一人、馬一匹、口取一人」とある。城内では寺社奉行の役人に「倉賀野宿飯玉神主高木出雲」と記した「手札」を若頭を通して提出した。今日でいえば名刺、或いは面会許可証にあたるものと思われる。

日記には「殿様裃にて御出座御目見」と書くばかりで、それ以上の詳しい様子はわからない。神主出雲は御目見を無事に終えて、高崎の「町宿平野屋福八」方にて昼食を取り、七つ過（午後四時頃）に倉賀野に帰宿したという。帰りの道中も馬だったろうか。